

# 歴史民俗資料館だより

## 樽たる

樽は酒・醤油・味噌・漬物などを運搬・貯蔵するために用いる円筒状の木製容器です。

現在では桶と同様に、竹箍で締められた結樽が一般的で、樽といえば結樽のことを指すようになっていきます。しかし、結樽の出現時期は、明確ではありませんが、桶類が箍締め技法によって作られるようになったのは、鎌倉時代から室町時代以降のようです。江戸時代には、結樽が一般化し、その用途も拡大していききました。

結樽は、結桶と同じように十枚の樽を円形に連結して底に入れ、締木で竹の箍を締めて固定して作ったものです。

桶が広い用途を持っていたのに対して、樽は主として輸送用あるいは運搬用の容器として使われていました。結樽は醸造用大桶とともに、醸造業の大量生産・大量輸送の重要な担い手と

してまた、四斗樽は輸送専用のコンテナでした。

江戸時代以降に用いた樽の主なものには、四斗樽・手樽・角樽・扁樽・指樽などがありました。四斗樽はもっぱら酒の運搬用として用いたもので、これを化粧粧で包装したものを薦樽とか薦被りといわれます。手樽は一升（約一・八リットル）、五合（約〇・九リットル）入りなどの細長く作った酒樽で片手または両手の取っ手が付き、酒の配達用に用いました。個々の家で所有する場合もありましたが、多くの場合、酒屋が貸し樽として用意し、客の注文に応ずる形態をとっていました。酒屋の丁稚小僧は得意先から空いた手樽を集めるのが大事な仕事のひとつであり、これを樽拾いといいました。江戸時代後期になると手樽に代って陶器製の貧乏徳利が普及してきましたが、これも酒屋が貸し徳利として備えて置いたものです。角樽は両手の取っ手の付いたもので、手樽の一種ですが、朱・黒などの漆塗りです。祝儀用の酒樽として用い、扁樽

は偏平に作った結樽です。指樽は注ぎ口が上部についた箱状の樽で、漆塗りが多用されました。扁樽・指樽も角樽と同様に祝樽として用いました。

樽は桶と同様に広く用いられ、江戸時代から明治時代にかけては、空樽を買い集める樽買いや空樽問屋が町場に存在しました。明治時代に入るとビヤ樽やセメント樽などの胴太で鉄箍を用いた洋樽が入ってきますが、ガラス工業の発達によって小型の樽類はガラス瓶に代わりました。

資料館では、民族資料として木製、陶製の樽を紹介、展示しています。



笠松町歴史民俗資料館

〒501-6052 笠松町下本町87

☎388-0161 FAX388-0185

長良川流域市町村の

「川文化ネット◇なごろ」交流コーナー

15



美濃市 上有知川湊灯台

美濃市の中央を北から南へと流れる清流長良川。その長良川畔に金森長近公によって開かれた上有知湊は、江戸時代から明治時代末年までこの地方の和紙や木材など物資の流通、交通の中心として栄えました。その面影が今も残る川湊灯台は、江戸時代後期に建てられたもので、高さ9メートル、形式は全国的にも珍しい住吉型高灯籠です。標高68メートルに建つこの灯台は、川灯台としては日本一高いところにあります。

[アクセス] 長良川鉄道「美濃市駅」下車徒歩15分  
岐阜バス「小倉公園前」下車徒歩5分  
東海北陸自動車道美濃I・CからR156を北へ2.5km(約10分)

[問合せ先] 美濃市役所総務部企画政策課 ☎0575・33・1122(内線442)



上有知川湊灯台